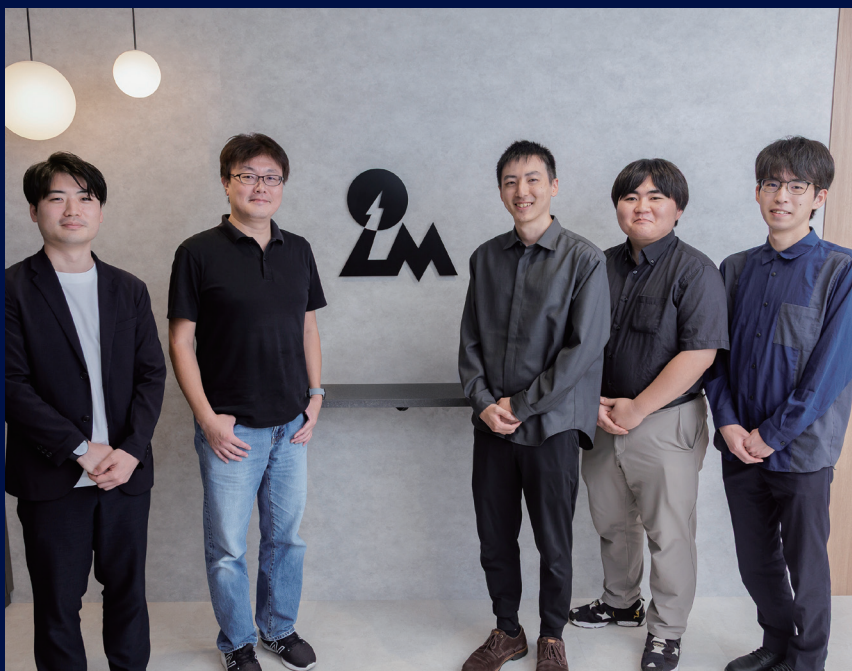


株式会社オー・エル・エム・デジタル： アニメ×生成 AI の可能性を探る 研究開発プロジェクト「ANIMINS」に Dell PowerEdge XE シリーズを採用

生成 AI による支援で
アニメ制作ワークフローの
イノベーションを目指す



ビジネス課題

アニメ、3DCG、VFX 制作を手掛けるオー・エル・エム・デジタルの研究開発部門では、長年にわたりアニメ制作業務の『デジタル映像表現の新しい可能性の具現化』と『映像制作現場における高効率化の実現』に取り組んでいます。この活動をさらに加速させるべく、アニメ制作現場における生成 AI の利活用を調査研究するプロジェクト「ANIMINS (ANIME INSight アニミンズ)」を発足。そのインフラとなる GPU サーバーの導入に取り組みました。

導入効果



原画・動画・仕上げ工程やキャラクター描画作業の
効率化に寄与



クリエイター不足をはじめとするアニメ業界の課題解決に貢献



iDRACによりGPUサーバーの状況を効率的に監視



デル・テクノロジーズの支援を活用し短期間での
インフラ導入に成功

ハイパフォーマンスな GPU サーバーを「ANIMINS」のインフラとして活用することで、アニメ業界での生成 AI 利用に関する基礎研究やプロダクションユース化に向けた研究開発、業界調査などの活動が円滑に行える環境を実現。クリエイター不足をはじめとするアニメ業界の課題解決に、大きく貢献するものと期待されています。

ソリューション

- [Dell PowerEdge XE8640 サーバー](#)
- [Dell Precision 7960 タワー ワークステーション](#)
- [Dell PowerSwitch N3248TE-ON スイッチ](#)
- [ブロードバンドタワー データセンターサービス](#)

産官学連携による生成 AI 研究を支える共用設備として、「NVIDIA H100 SXM」GPU を 4 基搭載した高性能サーバー Dell PowerEdge XE8640 を採用。これに高性能ワークステーション Dell Precision 7960 タワー ワークステーションも組み合わせることで、プロジェクト参加機関の調査・研究活動を後押しする強力なインフラ環境を実現しています。データセンターは、ブロードバンドタワー社の第3サイト（渋谷データセンター）を採用。メンテナンス時にも駆け付けしやすい都市型のデータセンターで、高電力 GPU サーバー等の保守性と運用性の両立を実現しています。



『ANIMINS』参加機関の生成 AI 研究開発を加速する上で、Dell PowerEdge XE シリーズの優れたパフォーマンスが大いに役立っています。今回のインフラ構築をあらゆる側面から支援してくれたデル・テクノロジーズにも大変感謝しています。

株式会社オー・エル・エム・デジタル
取締役／R&D スーパーバイザー
研究開発部門
四倉 達夫 氏

自社内に研究開発部門を有する デジタル映像制作のエキスパート

日本を代表する映像制作会社として、アニメや映画、ドラマなど、多彩な映像作品の制作を手掛ける OLM グループ。その中核企業の一社が、アニメーションや 3DCG、実写向け VFX などのデジタル映像制作を行うオー・エル・エム・デジタル(以下、OLM デジタル)だ。同社では国内でも最先端の映像制作環境を活用し、ハイクオリティな作品群を世に送り出し続けてきた。その中には、「ポケットモンスター」シリーズや「ベイブレード」シリーズなど、海外でも高い人気を博している作品も数多い。

さらに、もう一つ注目されるのが、自社内に研究開発部門を設置している点だ。OLM デジタル 取締役／R&D スーパーバイザー 研究開発部門 四倉 達夫氏は「映像制作会社が自前で R&D 部門を持つケースは珍しいですが、当部門には既に約 25 年の歴史があります。現在は『デジタル映像表現の新しい可能性の具現化』と『映像制作現場における高効率化の実現』の 2 点をミッションとし、様々な活動を行っています」と説明する。

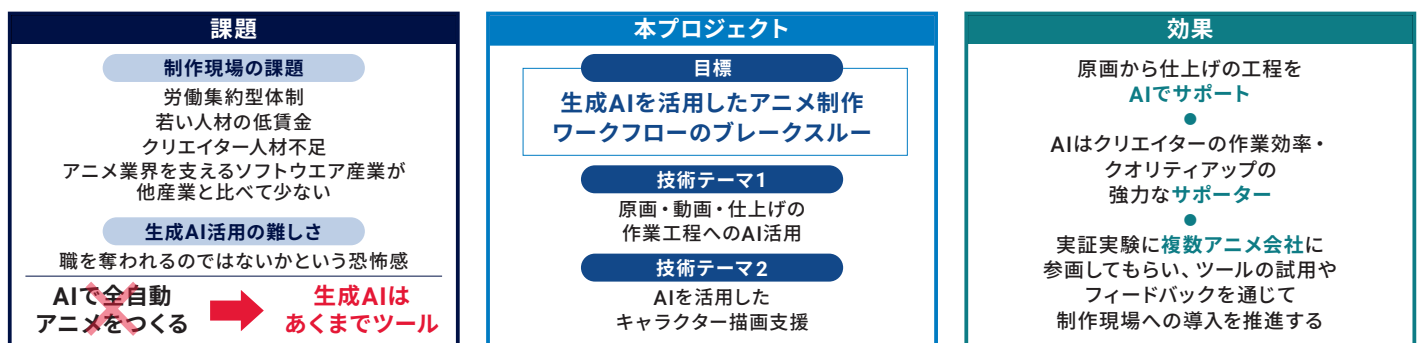
日本のアニメがグローバルでヒットしているのも、斬新で豊かな映像表現があればこそだ。特に近年の映像制作では、CG などのデジタル技術が欠かせなくなっているだけに、同部門の役割は非常に重い。また、その一方で、業務効率化や生産性向上も極めて重要なテーマである。「作品数もどんどん増えていますので、クリエイターにはクリエイティブ業務に集中してもらいたい。そこで、データの取り回しなどの作業については、当部門で効率化を推進しています」と四倉氏は続ける。

アニメ制作業務における 生成 AI の可能性を探る プロジェクト「ANIMINS」を発足

このように先進的な活動を展開する同社だが、今回新たなテーマとして取り組んだのが生成 AI の利活用である。その背景には、アニメ業界が抱える課題があった。四倉氏は「たとえば、アニメ業界は昔から慢性的な人手不足で、人海戦術と力技で乗り切ってきた歴史があります。しかし昨今では、制作環境がアナログからデジタルに変わり、制作工程もどんどん複雑化しています。こうした中、今後も限られた納期内で作品を作り続けるのは厳しくなりつつあります」と明かす。そこで、こうした課題を解決するためのテクノロジーとして、生成 AI に目をつけたのである。

実は同社では、数年前から AI の研究を進めており、キャラクターの彩色を AI で行う技術なども開発している。さらに、この動きを加速させるきっかけとなったのが、経済産業省と新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)が主導する、生成 AI の開発力強化に向けたプロジェクト「GENIAC (ジーニアック)」だ。同社が代表事業者を務めるプロジェクト「ANIMINS (アニミンズ)」が、この GENIAC の「データ・生成 AI 利活用実証事業」の第 1 期に採択されたのである。

生成AIをアニメ業界の課題解決につなげたい



生成AIはあくまでツール

成功事例をつくる

ツール開発がゴールではなく、生成AIを活用した **制作のモデルワークフローの構築** を目指す

生成AI技術を実用レベルで検証

アニメ特化生成AIツールの開発

制作効率化の定量評価

業界の仲間づくりと普及促進

ANIMINSにおける3つのコンポーネント

コンポーネント	ゴール
プロダクションユース アニメスタジオへ技術展開	アニメ技術の実用化 ショートムービー制作：モデルワークフロー
基礎研究 技術テーマ1、2	アニメ技術 学術論文・学会発表
アニメ×AI調査 アニメ業界・隣接領域調査	アウトリーチ活動：ANIMINSプロジェクトの周知 業界連携強化・日本のアニメ業界の将来を形づくる

「ANIMINS は 2024 年 12 月、『アニメ×生成 AI』に関する調査研究を目的として、当社を代表事業者として、9 つの大学と 2 社のスタートアップ企業、OLM グループ 3 社が共同でスタートしました。各参加機関は、『基礎研究』『プロダクションユース』『アニメ×AI 調査』の 3 つの分野でそれぞれの調査研究を行っています」と四倉氏は説明する。今回同社では、「生成 AI を活用したアニメ制作ワークフローのブレークスルー」を調査研究の目標に掲げており、「原画・動画・仕上げ作業工程への AI 活用」と「AI を活用したキャラクター描画支援」の 2 点を具体的な技術テーマとしている。「ここでの重要なポイントは、生成 AI を使って全自動でアニメを作るわけではないという点です。生成 AI はあくまでもツールであり、これを用いた新しいアニメ制作のモデルワークフローを構築することが狙いです」と四倉氏は説明する。

もっとも、GENIAC に採択されたことで、同社では ANIMINS の活動を支える生成 AI インフラを急ぎ用意する必要に迫られた。そこで新たに導入されたのが、デル・テクノロジーズの高性能 GPU サーバー「Dell PowerEdge XE シリーズ」（以下、PowerEdge XE シリーズ）と「Dell Precision 7960 タワーワークステーション」である。

優れた性能と使いやすさを評価し Dell PowerEdge XE シリーズを 生成 AI 研究のインフラに採用

本プロジェクトのパートナーにデル・テクノロジーズを選んだ理由について、四倉氏は「当初はクラウドの利用も検討しましたが、我々のニーズに合うサービスがなかなか空いていませんでした。とはいえ、プロジェクト期間には限りがありますので、インフラ環境をできるだけ早く用意なくてはなりません。そこで、デル・テクノロジーズに相談してみたところ、GPU サーバーやデータセンター、料金支払いなども含めたトータルな支援を提供できるとのこと。これは大変助かりましたね」と語る。

また、OLM デジタル 研究開発部門 シニアシステムエンジニア 石井 裕気氏も「通常の制作業務用システムは社内のサーバールームに設置していますが、ANIMINS 用のインフラは電力等の関係でブロードバンドタワー社のデータセンターに置くことになりました。当然、社内システムと同じような保守体制が用意できるかという問題が生じますが、普段から使い慣れている PowerEdge であればこの点の心配もありません。また、デル・テクノロジーズの手厚いサービス・サポートも、大きな安心材料になりました」と語る。



“ 当社では、社内の制作業務システムで数多くの Dell PowerEdge サーバーを活用しており、その使い勝手を高く評価しています。加えて、ニーズに応じた豊富なラインナップが用意されていることも、今回の採用の決め手になりました。

株式会社オー・エル・エム・デジタル
研究開発部門
シニアシステムエンジニア
石井 裕気氏

具体的な製品としては、高性能 GPU「NVIDIA H100 SXM 80GB」を 4 基搭載した「Dell PowerEdge XE8640」を採用。これを ANIMINS 参加機関の共用設備として提供すると同時に、9 台のワークステーション「Dell Precision 7960 タワーワークステーション」も各機関それぞれの専用設備として提供している。ネットワークスイッチとしては、Dell PowerSwitch N3248TE-ON をベースにしている。「PowerEdge XE シリーズはラインナップも充実していますので、プロジェクトの予算に合わせたモデルを選べたのも良かった。特に今回は、できるだけスペックを高めたかったので、GPU も PCIe 版ではなく SXM 版を選んでいました」と石井氏は続ける。

最先端の生成 AI 研究を支えるインフラだけに、環境構築にあたっては様々な工夫が凝らされている。「プロジェクト期間内のみ運用するシステムですので、将来の撤収を見越した設計を行い



今回は『NVIDIA H100 SXM』搭載モデルを導入しましたが、グローバルベンダーならではの製品供給力もデル・テクノロジーズの大きな強みですね。日頃のサービス・サポートも大変手厚いので、安心して製品を活用できます。

株式会社オー・エル・エム・デジタル
研究開発部門
シニアシステムエンジニア
深谷 祐太 氏



ますので、効果を単純に数値化することは難しい。しかし、たとえば我々の研究テーマである原画・動画・仕上げ工程でいえば、場面やシーンにはよるものの、30%程度の効率化を図れると見込んでいます」と四倉氏は語る。

もちろん、先にも触れた通り、生成 AI に自動でアニメを作らせることが今回の研究目的ではない。生成 AI を用いた新たなアニメ制作ワークフローを追求することで、人手不足や工程の複雑化といったアニメ業界の課題解決に貢献していくことがゴールである。「ANIMINS での取り組みを通して、よりクリエイティブな作品が生まれたり、アニメ業界に新たなイノベーションをもたらせるかもしれません。我々としてはクリエイターに寄り添いつつ、研究開発を推し進めていきたい」と四倉氏は力をこめる。

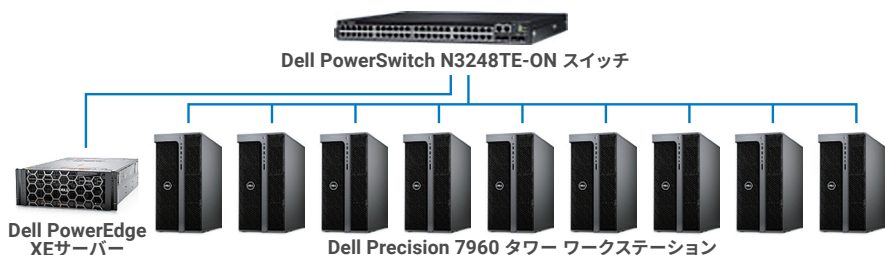
研究開発を下支えする PowerEdge XE シリーズにも、高い評価が寄せられている。「生成 AI 研究では、長年に渡って自社資産として蓄積してきた、画像などの大容量データも使用しますので、パフォーマンスに余裕がないとかなり困ることになります。それだけに、PowerEdge XE シリーズを導入しておいて良かったと感じています」と石井氏はにこやかに語る。同社では ANIMINS プロジェクトの終了後も、引き続き各機関とのコラボレーションを進めていく考えだ。日本アニメの未来を切り拓く同社の活動を、デル・テクノロジーズもしっかりと支えていく。

ました。また、各機関が自由に調査研究を行えるよう、セキュリティを担保した上で管理者権限もお渡ししています」と語るのは、OLM デジタル 研究開発部門シニアシステムエンジニア 深谷 祐太氏。システムエンジニア 馬場 洸輔氏も「インフラの監視については、各マシンにエージェントを導入してメトリクスを取得。これをクラウドベースの監視・管理プラットフォームで可視化しています」と続ける。また、同 中山 聖夜氏も「アカウントの管理やコミュニケーションツールの整備、新機能の調査確認なども当社側で実施し、各機関に快適にインフラ環境を利用してもらえるようにしています」と語る。今回初採用となったブロードバンドタワーのデータセンターサービスについても、「時間にあまり余裕がない中、電力や冷却などの相談にも快く応じてもらえて非常に助かりました。施設の立地が良く、当社から近いのも大変便利です」（石井氏）、「入館手続きのスムーズさなど、セキュリティと使い勝手のバランスが良い点も気に入っています」（深谷氏）と、高い評価が寄せられている。

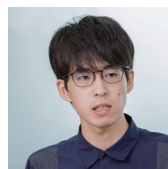
産官学共同の研究開発を通して アニメ業界の課題解決と イノベーションに貢献

PowerEdge XE シリーズによる生成 AI インフラが導入されたことで、「アニメ×生成 AI」にまつわる調査研究にも、大きな弾みがつくことと期待されている。「研究と実際の制作現場は異なり

生成AI基盤 システム構成



株式会社オー・エル・エム・デジタル
研究開発部門
システムエンジニア
中山 聖夜 氏



株式会社オー・エル・エム・デジタル
研究開発部門
システムエンジニア
馬場 洸輔 氏

デル・テクノロジーズ ソリューションの詳細はこちら

この記事を共有する



DELLTechnologies

Copyright © 2025 Dell Inc. or its subsidiaries. All Rights Reserved. Dell Technologies、Dell、EMC の製品およびサービスにかかるその他の商標は米国 Dell Inc. またはその子会社の商標または登録商標です。その他の社名および製品名は各社の商標または登録商標です。本事例は情報提供のみを目的としています。事例内容および事例内に記述された役職名は 2025 年 10 月に行われた取材時のものです。デル・テクノロジーズは、本事例の表現または暗示された内容にいかなる保証もいたしません。

デル・テクノロジーズ株式会社
<https://www.dell.com/ja-jp>